

○塩原澄子 武藤安子

(横浜国立大)

目的：幼児期の子どもが、生活場面において自分の家族の情緒的関係をどのようにイメージしているかを調べ、その発達的变化について考察する。

方法：対象は、神奈川県 K 市および Y 市の私立幼稚園の園児 94 名（4 歳児 41 名、5 歳児 53 名）である。手続きとして、本研究者が CAT（幼児・児童絵画統覚検査）などを参考にし、家族のイメージを喚起する生活場面を表した図版（6 枚）を作成し、個別面接調査を行った（20 分）。調査時には、CAT の提示手続きを参考にした。期間は 1998 年 12 月および 1999 年 11 月である。

結果および考察：第一に、生活場面における情緒的依存の対象は、4 歳児、5 歳児ともに父親、母親が多く、それぞれに大きな違いは見られなかった。第二に、登場人物の役割のとらえ方について、4 歳児に比べて 5 歳児は、家族間の関係を表す言葉が用いられるようになった。第三に、4 歳児に比べて 5 歳児は、生活領域の広がりが見られ、しかも時間・空間的な規定性を超えて安定した家族イメージが発達していることが明らかになった。